

FLORA KANAGAWA

Jun. 1. 1999 No. 48

神奈川県植物誌調査会ニュース第48号

〒250-0031 小田原市入生田499 県立博物館内 神奈川県植物誌調査会

TEL 0465-21-1515 ・ FAX 0465-23-8846

振替 00230-5-10195



マンネンスギ。1959年以来、箱根では採集されておらず、絶滅とされていたが、1997年10月、箱根ブロックの調査により再発見された(古川公貴氏撮影)。

| | |
|--|-----|
| 古川冷實:穀粒のなかで最小のテフ | 540 |
| 田中一雄:クルマシダとウスヒメワラビ | 541 |
| 城川四郎:タネツケバナ類(<i>Cardamine</i>)の検討 | 542 |
| 三輪徳子・城川四郎:ハエドクソウとナガバハエドクソウ | 545 |
| 長谷川義人・金子紀子:東京湾側のユキヨモギ | 548 |
| 長谷川義人:訂正と追加 | 548 |
| 勝山輝男:神奈川県植物誌備忘録(1) | 549 |
| 佐藤恭子:神奈川県植物誌イネ科の担当からのお願い | 555 |
| 諏訪哲夫:厚木市大山山頂植物記 | 556 |
| 木場英久:植物誌1988のコウセンガヤ | 558 |
| 田中徳久:『神奈川県植物誌1988』で取り上げられていない帰化植物ほか(2) | 558 |
| 高橋秀男:先人の標本をたずねて(1) | 559 |
| 事務局:1998年度総会報告 | 560 |
| 事務局:訂正 | 562 |

穀粒のなかで最小のテフ

(古川冷實)

テフ *Eragrostis tef* (Zucc.) Trotter を同定不十分ながら報告する。

1998年7月19日、横浜市金沢区柴町を車で走行中、白く繊細に伸びた姿に風を受けて立つカゼクサ属らしき影が窗外を流れ、これまで目にしてきたいづれともかなり異なる印象を受けた。引き返して観察したが何者なのかまったく見当がつかない。

図鑑等で世界のカゼクサ属50数種を検討したところ *E. tef* に行きついた。エチオピアではその長さ1mmほどの穀粒でパンの一種「インジェラ」を作るといふ。しかし眼前の穀粒は微小なうゑ(読者も紙に1mmの粒を描いて想像してみしてほしい)しかも表面に張りのないものも多く、いったいどれだけの数を集めれば一個のパンを成すのかと、考えるほどにため息が出た。結実小花も全体の数割という心細さで、これが主食向けに栽培されるとは想像しにくく、あるいは同定を誤ったかなどと迷った。翌日たまたま会った勝山輝男氏は、かつて試みにカゼクサ属数種の果実を故森茂弥氏とともに食べてみたことがあるという。だが筆者はテフに穀物のイメージをもてず、口に入れるのに困難をおぼえた。

国立科学博物館に *E. tef* の標本3点と異名に同定されているもの1点があった。うち2点は大井次三郎氏がアフリカからの種子を三島市の国立遺伝研究所で栽培したもので、これも登実果はまばらだった。一方、他2点はイギリスの標本で、うち1点はすべての小花が結実しており、しかも果実の色、艶、張りがよく、これならエチオピアの先人もパンを作る気になったろうと



テフの小穂。

やっと納得した。いづれにせよ形質はこのほど採集のそれと近似し、*E. tef* ではないかとの推測を深めた。

エチオピアでは昔からテフで作るインジェラが最も重要な食料だった。栄養価も高く蛋白質などはコムギと同等、カルシウムは4.8—5.7倍で、鉄分も豊富。栽培量はコムギ、オオムギなどより多い。

テフの語源はエチオピア語のTefa—紛失—で、落とすとまず見つからないことによる。カゼクサ属の英名は -love grass となるものが多く、シナダレスズメガヤが Weeping love grass であることはよく知られている。ちなみにコスズメガヤは Little love grass、カゼクサは Wind love grass、ニワホコリは Dust love grass と面白いが、テフは Tef または Teff とそっけない。和名については、帰化植物便覧(太刀掛優, 1998)によれば琉球植物目録に「テフ」とあり、復帰後に沖縄島へ帰化したと記されている。

金沢区の同地になぜ種子が到来したのかは分らない。道路の法面に30株ほどがまばらにつらなっていたが、法面の上端に接する平面はかなり以前からある2つの畑で、周囲もふくめて牛糞はまかれていない。その反対側は今年開設された市民農園だが、道路はこの農園とともに開通したばかりで、法面もこれに伴って築かれた。

同定のポイントとしては(1)第2包穎がとても長い、(2)全草に腺点がない、(3)枝の基部に長毛がある、(4)果実が長さ約1mm、(5)1年草で引き抜きやすい——を確認できればよい。

以下は性状と形質。

1年草。腺点はない。稈は直立するか基部が倒伏し、高さ50-100cm。葉は長さ20-30cm、幅2-5mmで無毛、ざらつく。葉鞘は無毛で口部には長毛がある。葉舌は高さ0.3mmほどの毛列となる。

円錐花序は長くて(15-)30-40cmとなり、やや弓形に傾くことが多い。枝は斜上また

は中軸に寄り添い、最下部で数本輪生し、その上では1-2本ずつ出て、さらに1-2回分枝する。中軸と枝の分岐には長毛があり、最下部は5本以上、その上では1-2本を数える。最下部を除く枝の基部には小穂を付けない。

小穂は扁平で長さ2.5-6mm、幅0.9-1.7mm、4-12小花からなり、薄緑色から灰緑色で一部紫色をおびる。各穎とも中央脈に沿って鋭い竜骨となる。第1包穎は長さ約1.5mm、第2包穎は長さ2.2-3.3mm、最下護穎は長さ2.3-2.7mmで側脈ははっきりしている。内穎は長さ約1.8mm、おしべは3個で、葯は長さ0.2-0.3mm、穎果は長さ0.9-1.2mmで、成熟しても脱せず、護穎、内穎とともに残るが、しばらくして一部は散り落ちる。

同定にあたり標本閲覧の便宜を図って下さった国立科学博物館の秋山忍先生には深く感謝申し上げる。

主な参考文献

- Tsvelev, N.N., 1976. Grasses of the Soviet Union, Part I & II (Eng. Ed. 1984. A.A. Balkema. Rotterdam).
- Hedberg, I. & Edward, S., 1995. Flora of Ethiopia and Eritrea Vol. 7. Addis Ababa University, Ethiopia.
- Tutin, T.G. et al. ed. 1980. Flora Europaea. Vol. 5. Cambridge Univ. Press.
- (財)日本健康開発財団, 1978. 標準食品成分表, 永岡書店。

クルマシダとウスヒメワラビ

(田中一雄)

クルマシダ

Asplenium wrightii Eat. ex Hook.

(1)1997年11月4日,小田原市根府川の標高約300m.星ヶ山東麓の,やや乾燥気味のヒノキ林斜面で1株発見した。全長50cmほどの胞子囊群を付けた成株である。葉を4枚出していたが,完全な葉は1枚のみで

あった。

(2)1998年12月7日,南足柄市荻野の標高約280m.明神ヶ岳北東麓の,あまり湿潤とは思えないスギ,ヒノキ混植林の斜面で1株発見した。全長70cmほどの胞子囊群を付けた成熟した株で,完全な葉を6枚出していた。

神奈川県レッドデータ生物調査報告書によれば,松浦(1958)に箱根での記録があるのみで,標本の所在について記述はない。現在の所,南足柄市産が北限産地と思われる。その後観察を続けているが,1999年2月現在,いずれも順調に生育している。クルマシダは1回羽状でチャセンシダ型の線状胞子囊群を持ち,葉身表面は濃緑色のエナメルを塗ったような強い光沢がある。伊豆半島以西の暗く湿潤な暖かい谷に多く見られる。箱根東麓で2箇所見られたことなどから,丹沢や三浦半島にも自生が考えられる。

ウスヒメワラビ

Acystopteris japonica (Luer.) Nakai

1998年4月23日,小田原市根府川の星ヶ山東麓の,標高約250mにある適湿なスギ林斜面にて,葉数30枚ほどの一群を発見した。ほぼ1m²の範囲に生育しており,同一根茎の群落と思われる。1999年12月現在,季節がら枯れかけてはいるが順調に生育している。

神奈川県レッドデータ生物調査報告書によれば,1950年代に丹沢の姫次~蛭ヶ岳に確実な記録と標本があるが,それ以外の記録は不確実なものが1例あっただけで,他に記録は見当たらないとのことである。

ウスヒメワラビは山地性のシダで,全長50cmほどの薄い葉質を持ち,浅緑色の羽片に黄色の胞子囊群,紫黒色の折れやすく細い葉柄に白色の鱗片を持った,繊細で美しいシダで,通常陰湿な林床に群生する。

今後,箱根や丹沢の山地で発見される可能性の高いシダと考えられる。

タネツケバナ類(*Cardamine*)の検討

(城川四郎)

オオバタネツケバナ, ミズタネツケバナ, タネツケバナ, タチタネツケバナはそれらの典型的な個体では識別に困ることはない。しかし、それぞれ変化が多く、どちらの分類群として整理すべきか迷う個体も少なくない。特にオオバタネツケバナとミズタネツケバナ, タネツケバナの境界が不明瞭である。身近にたくさん生えている植物たちであるだけに、いつも気になるが、今も解決できず、継続観察中である。千葉県植物誌資料12号に大場達之先生はミチタネツケバナの紹介とともに、タネツケバナ類の暫定的検索表のなかでミズタネツケバナはオオバタネツケバナとタネツケバナの中間的なものらしいとされている。

私もミズタネツケバナはオオバタネツケバナとタネツケバナの中間的なものとして整理するのがもっとも妥当と考える。まだ多年生, 越年生などの点で釈然としない部分もあるが、一応タネツケバナ類の分類特徴を次のように整理してみた。

参考図は検討標本の一部について、根生葉または茎基部の葉, 茎の中部に着く葉, 茎の上部に着く葉の代表的なものを下から上に順に並べたものである。

ミチタネツケバナ (図:P,Q)

Cardamine hirsuta

根生葉は花時にも緑色で、ロゼット状、頂小葉は側小葉より大きい場合が多く、各小葉はごく浅いきれこみがあるか、またはほとんど全縁円形である。茎葉は根生葉にくらべ貧弱で各小葉は茎の上部の葉ほど細くなり、最上部では狭披針形~線形となる。茎は直立するが基部で枝分かれすることが多く、主茎が不明瞭な場合もある。茎は無毛であるが、葉柄基部と葉の表面には粗い毛がある(在来種とは異質の毛)。果柄は花茎に狭い角度(約30°)で上向きに立つので、長果が茎に寄り添って立つように見える。分布域

を急速に広げつつある帰化植物として注目されている。私の担当する松田地区ではゴルフ場が分布源らしく、その周辺では特に多い。裸地、芝地、草叢にも生え、酒匂川の川原では水辺にも生育しているが、水田ではまだ見ていない。

タチタネツケバナ (図:M,N,O)

Cardamine flexuosa subsp. *fallax*

根生葉および茎下部の葉は、若い株ではよく発達、多数斜上し、頂小葉は側小葉とほとんど同大、いずれも他のタネツケバナ類にくらべ小型で、欠刻、湾入などのきれこみが顕著。花時には枯失するものが多い。茎葉はよく発達し、根生葉にくらべ各小葉は細長くなり、最上部では線形となる。茎は直立し、よく分枝する場合も主茎は明瞭である。茎も葉も多毛なものが多い。茎下部がまれに紫色を帯びるものがあるが普通全草緑色である。果柄は花茎にやや広い角度(約50°)で斜開するので、長果は花茎から離れて立つ(在来のタネツケバナ類共通)。林縁で見ることが多い。草の姿は一見ジャンジンに似る。タネツケバナほど普通ではない。

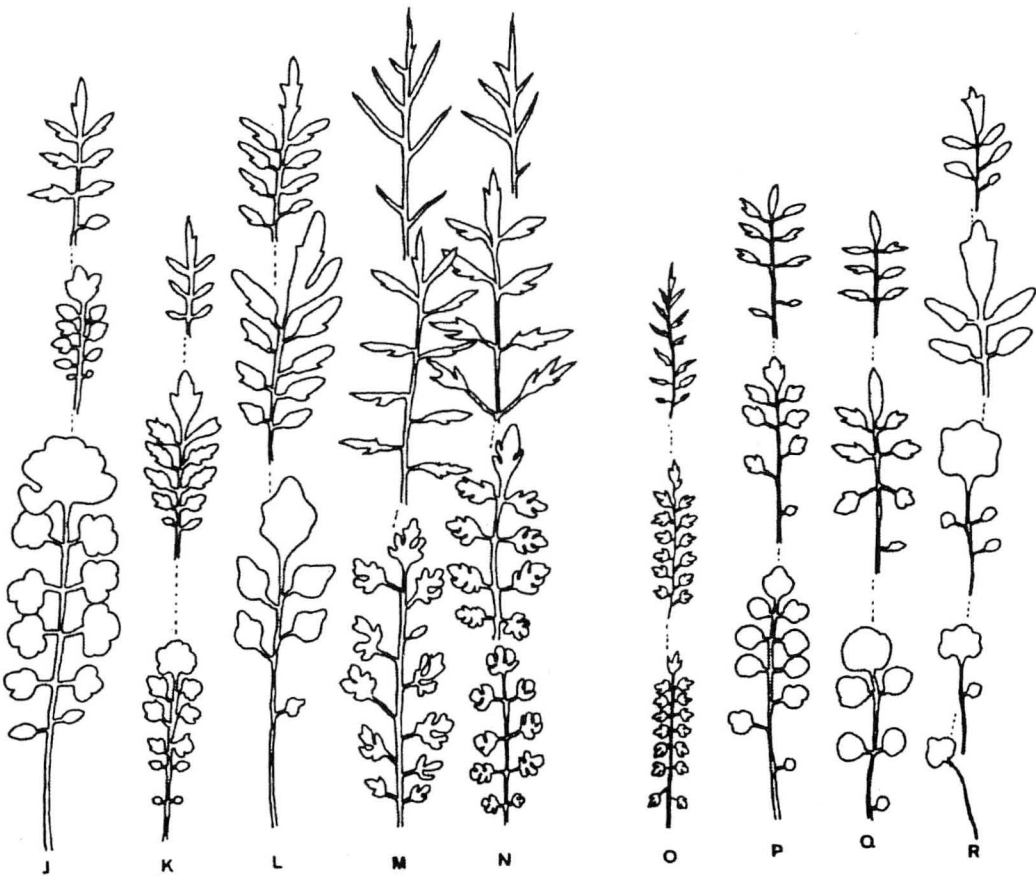
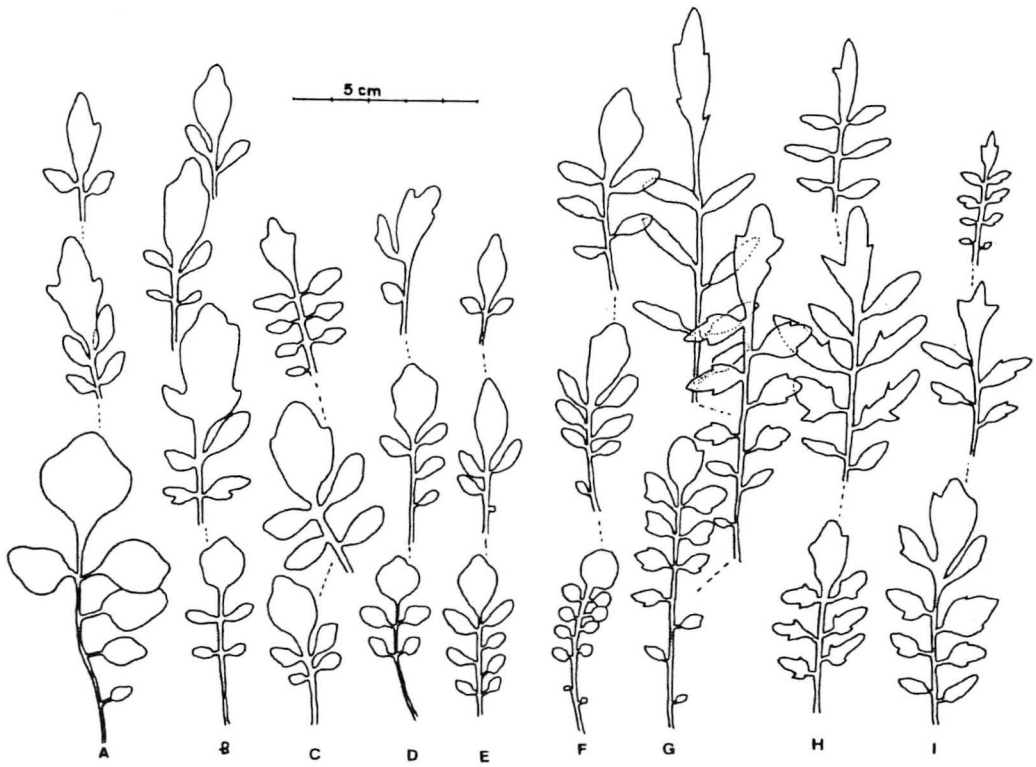
オオバタネツケバナ (図:A,B,C,D,E,)

Cardamine scutata

根生葉および茎基部の葉は、頂小葉が側小葉にくらべ明らかに大きく、各小葉はきれこみがほとんどなく全縁円形~楕円形、花時には完全に枯失していることが多い。茎葉はよく発達、頂小葉が側小葉にくらべ際立って大きく、茎上部の葉ほど長くなる傾向はあるが、茎最上部でも頂小葉の幅は10mm以上が保たれ、側小葉はふつう2対以下で少ない。茎は基部からよく分岐し、主茎不明瞭な場合と、基部分岐が少なく主茎明瞭な場合がある。茎も葉もほとんど無毛または少毛。全草緑色である。長果は花茎から離れて立つ(在来のタネツケバナ類共通)。水辺に生える。

ミズタネツケバナ (図:F,G,H)

Cardamine flexuosa var. *latifolia*



根生葉および茎基部の葉は、頂小葉が側小葉にくらべ明らかに大きく、各小葉は多少きれこみをもつものが多く、花時にはほとんど枯失している。茎葉はよく発達、頂小葉が側小葉にくらべ明らかに大きく、茎上部の葉ほど長くなる傾向はあるが、最上部の頂小葉の幅は5mm以上が保たれ、側小葉の数はふつう3対以上ある。茎は基部からよく分岐して主茎が不明瞭な場合が多い。茎も葉も少毛。茎基部がまれに紫を帯びることがあるがふつう全草緑色である。長果は花茎から離れて立つ(在来のタネツケバナ類共通)。水辺に生える。

タネツケバナ (図:I,J,K,L,R)

Cardamine flexuosa

根生葉および茎基部の葉は他のタネツケバナ類同様に普通は羽状複葉で、頂小葉が側小葉にくらべやや大きく、各小葉は多少きれ

こみをもち、花時にも一部は残存していることが多い。ただし一年草型の貧弱な個体では根生葉が羽状複葉にならず、花期にも残る。茎葉はよく発達、頂小葉が側小葉にくらべやや大きい、茎上部の葉ほど頂小葉と側小葉の大きさの差はなくなり、茎最上部の小葉はいずれも狭披針形となり、頂小葉の幅は5mm以下となる。側小葉はふつう3対以上。茎は基部からよく分岐して主茎が不明瞭の場合が多いが、ときに分岐が少なく主茎明瞭の場合もある。毛はふつう茎下部に多く、葉は葉柄と葉縁だけに見る場合が多いが、毛の量は個体による変化が非常に大きい、少なくとも茎基部は紫色を帯びる。長果は花茎から離れて立つ(在来のタネツケバナ類共通)。水田の縁、耕されることの少ないみかん園などに発育のよい株が多い。貧弱な個体はさまざまな環境に見られる。

検索表試案

- A. 茎葉はあまり発達せず、根生葉がよく発育して、花期にもロゼット状でめだつ。果柄は狭い角度(30度)で斜めに出るので長果は茎に寄り添うように立つ ミチタネツケバナ
- A. 茎葉が発達し、根生葉は花期には残存状態か枯失していることが多く、ロゼット状であることはない。果柄は茎にやや広い角度(約50)に斜開するので、長果は茎から離れて立つ
- B. 頂小葉と側小葉はほぼ同大。根生葉や茎の中部以下の葉では、各小葉ともに深い湾入、欠刻がある。茎上部の葉の小葉は線形となる。主茎が明瞭で、茎も葉も多毛
..... タチタネツケバナ
- B. 頂小葉は側小葉より大きい。根生葉や茎の中部以下の葉では、各小葉ともに湾入、欠刻があっても浅くてめだたない。茎上部の葉の小葉は披針形~卵形。主茎は不明瞭であることが多く、茎や葉はほとんど無毛から多毛まで変化がある
- C. 根生葉や茎基部の葉は残存していることが多い。茎上部の葉の頂小葉は披針形となり、幅はふつう5mm以下、側小葉は3対以上ある。少なくとも茎の下部や葉柄、葉縁には毛があり、茎下部は紫色を帯びる タネツケバナ
- C. 根生葉や茎基部の葉は枯失していることが多い。茎上部の葉の頂小葉は広披針形~卵形で、幅は狭くても5mm以上あり、側小葉よりめだって大きい。茎や葉は無毛か、少毛。ふつう全草緑色である
- D. 茎上部の葉は頂小葉が楕円形~卵形で、幅は10mm以上あり、側小葉は2対以下であることが多い。全草緑色 オオバタネツケバナ
- D. 茎上部の葉は頂小葉が広披針形~楕円形で、幅は5mm以上あり、側小葉は3対以上であることが多い。ふつう全草緑色、ときに茎基部に少し紫色を帯びる
..... ミズタネツケバナ

○本誌No.39(1994)P.421で小崎昭則さんがミチタネツケバナの帰化についての紹介に添えて比較の意味でタネツケバナ、タチタネツケバナの標本コピーを示されている。そのタネツケバナは根生葉が羽状複葉にならない一年草型の貧弱な個体(図R型)で、庭の隅や芝生の中に年中顔を出し、普通に見られるが、タネツケバナの標準型ではないので比較標本としては不適当なようである。タチタネツケバナとされたものは、小葉が他のタネツケバナとほぼ同大であること、明らかな頭大羽状に見えることから、私の認識しているタチタネツケバナとは違うものようである。

○コタネツケバナについては検討資料を得ていないので今回触れなかった。横浜港での古い記録や小崎さんの川崎での記憶などがあり、現在も県内分布の可能性はきわめて高い。小葉基部がくさび形、葉縁にときに微毛がでる以外は無毛、種子の周囲に狭いひれがあるという特徴があるという。

ハエドクソウとナガバハエドクソウ

(三輪徳子・城川四郎)

はじめに:ナガバハエドクソウはハエドクソウと葉形が多少違うだけで、せいぜい品種レベルの違いとして扱っている文献が多い。参考文献として重宝している日本の野生植物(平凡社)ではナガバハエドクソウは無視されたのか記述されていない。筆者の一人城川が県植物誌1988のハエドクソウを担当した記述でも、研究不十分のまま品種として扱った。その標本検討当時、小崎昭則さんからハエドクソウとナガバハエドクソウの開花期は違うのではないかとの貴重な指摘を受けながら、追求を怠ったり、植物誌1988にその指摘を生かすことができなかつた。気にかかっていたので、その指摘を解明するためにハエドクソウとナガバハエドクソウの両者について、詳

細な検討を加えた。その結果、小崎さんの指摘のように両者の開花期のピークはほぼ1ヵ月の差があるだけでなく、その他の点でもかなりの相違があることを明らかにすることができた。両者の相違点に重点をおいて調べた結果は次のようである。

分布と個体数:文献の多くが両者を区別して扱っていないので、分布や個体数の状況を文献からは知ることができない。先年出版された長野県植物誌ではハエドクソウについて「葉は普通卵形で…、時に細長い…ものがありナガバハエドクソウと呼ぶ」と記している。この文面からはハエドクソウが普通で、ナガバハエドクソウが時に現われるように読みとれる。しかし、筆者らの神奈川県における観察では、ナガバハエドクソウが圧倒的に多く、普通である。静岡県植物誌ではハエドクソウは深山の林中にあり、少ないとし、ナガバハエドクソウは暖帯山野に普通としている。どちらが普通かという点については正しく認識されていると思われる。しかし、ハエドクソウが都市周辺の二次林で多く採集され、深山に限るものではないことや、ナガバハエドクソウを富士山の西臼塚のブナ帯で多数観察した事例から、それが暖帯に限るものでもないことは確かである。

生育環境:ハエドクソウの生育している周辺にはナガバハエドクソウの生育も見るのが普通であるが、ナガバハエドクソウだけが観察され、ハエドクソウを見つけない場合は甚だ多い。このことは両者の好む環境に相違があるのではなく、分布個体数の相違によるものと思われる。両者とも半日陰の林床や林側に生育する。**開花期:**ハエドクソウの開花は7月1日ごろに始まり、最盛期は7月15～25日。ナガバハエドクソウの開花は6月1日ごろに始まり、最盛期は6月15～25日。両者には約1ヵ月、開花最盛期のずれがある。

根:ハエドクソウの根はナガバハエドクソウの根に比べ明らかに細く、数が多い。したがって根だけでも両者の識別は可能である(図のRとrを参照)。

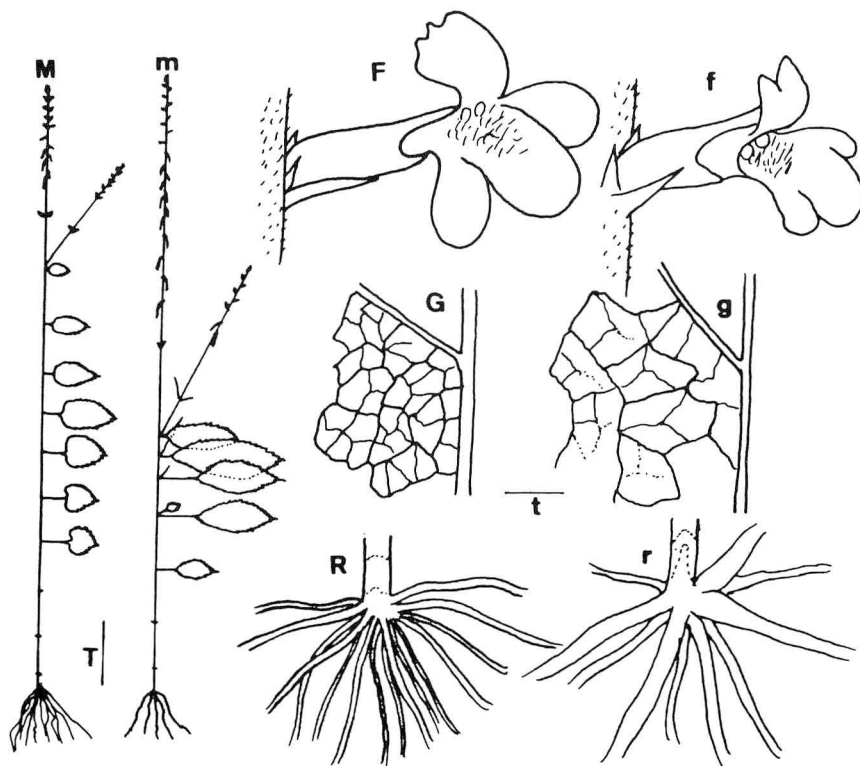
茎:ハエドクソウの花軸基部までの高さはほぼ90cm以下、節の数は13以下、各節の間隔は上部でもほぼ同じ。ナガバハエドクソウの花軸基部までの高さはほぼ45cm以下、節の数は8以下、上部の節の間隔は狭まる傾向が強い(図のMとm参照)。

花軸:ハエドクソウの花軸は30cm以下、茎より短い。ナガバハエドクソウの花軸は60cm以下、しばしば茎より長い(図のMとm参照)。

葉:ハエドクソウの葉は7~10対、卵形~楕円形、葉脈の細脈が裏面の外面近くに分布するため細脈まで明らかに見える。ナガバ

ハエドクソウの葉は4~6対、長卵形~楕円形、葉脈の細脈は葉肉内に分布するため細脈は外から見えないかまたは不鮮明。1株全体の葉を見れば両者の葉形の違いは明らかであるが、上部の葉ではハエドクソウにも長卵形となるものがあり、葉形だけではナガバハエドクソウと識別困難な場合も少なくない。上部1~2対の葉と花序だけの標本では葉形だけに頼ると誤認の恐れがある。文献でナガバハエドクソウは葉が茎の上部に集まると表現されているのは、葉の数が少なく、上部の節の間隔の狭まる傾向が強いからであろう(図のGとg参照)。

花:ハエドクソウの花冠は長さ7~9mm、下唇の幅ほぼ6mm、上唇の2裂して生ずる二つの突起の両側にやや平坦部がある。ナ



M: ハエドクソウの模式図(1998.7.19 横浜こども自然公園で採取、花穂先端までの高さ1mの個体)、m: ナガバハエドクソウの模式図(1998.7.9 松田町で採取、花穂先端までの高さ1mの個体)、T: 模式図Mとmのスケール 10cm、F: ハエドクソウの花部拡大図、f: ナガバハエドクソウの花部拡大図、G: ハエドクソウの葉裏に見える葉脈、g: ナガバハエドクソウの葉裏に見える葉脈、t: 葉脈図Gとgのスケール 1mm、R: ハエドクソウの根、r: ナガバハエドクソウの根。

ガバハエドクソウの花冠は長さ6~7mm, 下唇の幅ほぼ4mm, 上唇は2裂して生ずる二つの突起だけで両側に平坦部はない。

両者ともに長さ1cmに満たない小さな花であるが, 並べて比較すれば明らかにハエドクソウの花の方が大きく, 上唇の2裂した突起の左右に広がりを持つ。花が小さいのでこの特徴を乾燥標本で確認するのは困難である。ちなみに多くの文献でハエドクソウの花として図解されているものは, ほとんどナガバハエドクソウの花で, 精選牧野植物図集(学習研究社)はハエドクソウの花のようである(図のFとf参照)。

まとめ:以上のことからハエドクソウとナガバハエドクソウの相違は軽微なものではなく, 根, 茎, 葉, 花のどの器官でも相違点があり, 花期も明らかに違いがある。今のところフィールド現場および完全な標本では, 両者の間で識別困難なものには接していない。現在, ハエドクソウは *Phryma leptostachya* var. *asiatica* の学名が用いられ, 北アメリカ産のものの変種とされている。ナガバハエドクソウはその品種として form. *oblongifolia* が用いられることが多い。しかし, わたしたちは品種レベルの扱いは不当で, ハエドクソウと並ぶ変種 var. *oblongifolia* の扱いが妥当であろうと考える。北アメリカ産の母種とされているものの実体を把握していないので学名の当否について述べることはできないが, ハエドクソウとナガバハエドクソウの関係については現在の扱いが不当であることを強調しておきたい。

付記

※1. どういうわけか新日本植物誌(至文堂), 原色日本植物図鑑(保育社)ではハエドクソウ科には「小苞はない」と記しているが, 1個の苞と2個の小苞がある。(図のFとf参照)

※2. ハエドクソウ科はゴマノハグサ科やクマツヅラ科によく似ているが, 子房1室, 種子1個の点で区別され, 独立の科として扱い, 1科1属1種で構成されるものとしてきた。しかし, クマツヅラ科の特殊形としてクマツヅラ科に所属させる見解もある。

※3. わたしたちの調査結果については継続的に検証を進める必要があることはもちろんである。茅ヶ崎ではきわめて興味深い標本が1点採集されていることや, 筆者の一人三輪はナガバハエドクソウで節間のつまらない型がまとまって生育しているのを観察した。ハエドクソウ, ナガバハエドクソウの両者の開花期のピークはかなりの差があるが同所で同時期に両者が開花している例も少なくない。当然雑種の存在が考えられるが, 今のところそれと確認できる標本には接していない。今後, 追求すべき課題は多い。

※4. お願い

県植物誌1988ではハエドクソウとナガバハエドクソウの扱いについて, 多くの文献と同じく, 明確に区別しないという誤りを冒したので, 県内の両者の正確な分布, 特にハエドクソウの分布が不明確である。一つのメッシュからハエドクソウかナガバハエドクソウのどちらかが採取されれば, そのメッシュの担当者はもうハエドクソウは採取済みとした場合が多いと考えられる。筆者らの観察では分布域も個体数もナガバハエドクソウの方がはるかに多く, 開花期も早いので各メッシュではナガバハエドクソウが先ず採取され, ハエドクソウは見過ごされた可能性が高いと考えられる。だから, 改訂版ではぜひハエドクソウの正確な分布図を作成したい。7月中旬がハエドクソウ採集の適期なので, その頃, ハエドクソウ未確認の各担当メッシュでは, 改めてハエドクソウに注意を払って採集して頂くよう会員皆様のご協力を期待する次第である。

東京湾側のユキヨモギ

(長谷川義人・金子紀子)

ユキヨモギ *Artemisia momiyamae* Kitam. (1934)は舩山泰一先生が関東大震災の後に鎌倉の稲村ヶ崎で見いだしたヨモギ属の一種である。舩山先生(現調査会顧問)を記念して京都大学の北村四郎先生が記載発表された。筆者の一人長谷川は、かつて舩山先生のご案内で基準産地の稲村ヶ崎東側の鎌倉市坂ノ下の崖下に本種を訪ねた。その後、長谷川は『横浜市南部高等植物仮目録』作成のため1965年に、東京湾岸の金沢区小柴周辺の追加調査を行った際に、小柴の集落の北側の海岸にユキヨモギが生育するのを発見した。海岸が埋め立てになりその後は忘れていたが、植物誌・横浜ブロックの金子紀子氏が最近本品を採集された。この採集品には純正なユキヨモギとヨモギとの雑種と考えられる、いわゆるイナムラヨモギも含まれていた。ユキヨモギは北村先生が当初発表されたように独立種の扱いにするか、原寛先生のようにカズザキヨモギ(ヨモギ)の変種 *Artemisia princeps* Pampan. var. *momiyamae* (Kitam.) H.Haraにする説もあるヨモギに近縁の種である。

金子紀子氏の私信を紹介する。(一部加除)

『金沢区柴町の山間に点在する畑がありました。1993年から1994年4月まで土地改良工事が行われました。新しく造られた法面にカワラヨモギ、ヒメヨモギなどが生えてきました。崩壊防止のために吹き付けられた種子に混ざっていたのだらうと思われ。高橋秀男先生に海岸近くにはユキヨモギとヨモギの雑種があるかもしれないと、葉の表面に毛のあるヨモギを探していたのですが、毛があるどころか夏になっても真っ白に毛が残るヨモギを見つけました。花は通常のヨモギより一回り大きく、やはり白い毛に覆われていました。それがユキヨモギでした。ユキヨモギ

は法面を工事していない昔からおなじ場所に点在し、ずっと以前からこの場所に生えていたようです。』

金子紀子氏と共著として報告する。

参考文献

- 長谷川義人, 1967. 横浜市内南部高等植物仮目録第2回改定. (未発表)
長谷川義人, 1994. 多摩丘陵と三浦半島の間地域の植物. 神奈川自然誌資料 (15): 73.
神奈川県植物誌調査会編, 1994. ユキヨモギのことなど. 舩山泰一先生論文集 p.9.

訂正と追加

(長谷川義人)

[1] ポプラの学名

FLORA KANAGAWA No.43:468~469にヤナギ科ヤマナラシ亜科の一覧を掲載した。この際、ポプラの学名を *Populus nigra* var. *italica* を用いたが、ポプラは近頃では雑種起源のものと考えられ学名は *Populus × canadensis* Moench. Verz. Ausl. Baume Weissent. 81(1785)が多用されるので、訂正しておきたい。この種は *P. deltoides* (♂) × *P. nigra* (♀) 或いは *P. angulata* (♂) × *P. nigra* (♀) と考えられている。

ポプラには栽培品種が10種以上あって、形状は一定でない。今回、学名を訂正することとしたが、この雑種は元来栽培中に出現したものと考えられ、その由来起源はあきらかではない。ポプラ類の同定は容易ではない。

[2] ウラジロウコギの学名. 神奈川県植物誌1988補遺に追加。

本種は未だ神奈川県で発見されないが、従来使用の学名は *Acanthopanax hypoleucus* Makino in B.M.T. XII: 18 (1898)であるが、最近、大橋はウコギ属に Gen. *Eleutherococcus* [Ohashi, in J.J.B.62:357]を採用したが、本種については触れていない。この組み合わせは『日本

種子植物集覧』にあり、次のようになる。

Eleutherococcus hypoleucus (Makino)
Nakai in Journ. Arn. Arb. V: 10(1924)

この件は、筆者の文献の見落としである。
[3]ハコネセンニンソウ(仮称)について。

FLORA KANAGAWA NO.32:352に
Clematis terniflora f. *hakonensis* (non
Franch. et Sav.) nom. *tantum* ハコネセン
ニンソウという予定名を書いたが、次のもの
と同じであったので、訂正を行いたい。
C. maximowicziana Franch. et Sav. Enum.
Pl. Jap. II: 261 (1878)

C. paniculata (non Gmelin 1791) Thunb.
(1794) f. *maximowicziana* (Franch. et Sav.)
Honda in Bot. Mag. Tokyo 51: 644(1937)

C. terniflora DC.(1817) f. *maximowicziana*
(Franch. et Sav.) Honda, Nom. Pl.
Jap.505(1939)

ホソバセンニンソウ(センニンソウと
同種、幼形といわれている。)

大井:日本植物誌(1953・1956再版)では
*C. maximowicziana*をセンニンソウの学
名とした。これは細い小葉を持つホソバセ
ンニンソウを同種と考えての採用であっ
たが、先行名の *C. terniflora* DC.が現在の
センニンソウの学名になった。この経緯に
就いては原先生の報文をお読み下さい。筆
者が幕山で採集した個体は、センニンソウ
の幼形であったと考える。ただしこれが固
定した火山変形のものであれば、和名をホ
ソバセンニンソウとして本田博士の学名
が使用できると考える。なお *C. hakonensis*
Franch. et Sav.はテッセンの異名である。

自身の不明をお詫びして訂正いたします。

参考文献

牧野富太郎, 1897. 日本産せんにんさう属ノ諸
種. 植物学雑誌 11: (327).

牧野富太郎, 1912. *Clematis japonica* Houtt.
植物学雑誌 26: 81.

田村道夫, 1953. 東亜産センニンソウ属につ
いての知見1. 植物分類, 地理 15: 17.

原 寛, 1975. センニンソウの学名 植物研究雑
誌 50: 155.

神奈川県植物誌備忘録(1)

(勝山輝男)

植物誌の調査もいよいよ大詰めとなっ
たが、標本や文献をチェックし始めると、
見逃していたものも含めて、さまざまな新
しい知見が出てきた。これらの詳細につ
いては植物誌2001で取り上げれば良いの
であるが、速報としてフロラカナガワに書
いておけば、残すこと1年となった野外調
査の参考になるものと思い、新産地の報告
も含め、手許にある話題を書きしるした。
イワイヌワラビ (オシダ科)

Athyrium nikoense Makino

箱根台ヶ岳(Oct.11,1965 城川四郎
YCM-7088), 箱根駒ヶ岳(May,31,1964 大
場達之)の記録があるが、植物誌1988の調
査では確認できず、神奈川県レッドデー
タ生物調査報告書(1995)では絶滅とし
た。1998年8月25日に丹沢山~蛭ヶ岳の北
面の、モミジカラマツの生えていた岩場
に隣接する岩場で採集することができた。ま



イワイヌワラビ. 丹沢, 1998.8.25.

た,9月4日には箱根神山西面でも見出すことができた。

ツルミヤマカンスゲ (カヤツリグサ科)

Carex multifolia Ohwi var. *stolonifera* Ohwi

ミヤマカンスゲに似て,やや小型で,葉が軟らかく,匍匐枝を伸ばすものが,箱根三国山で採集され,ハコネカンスゲ(ミヤマカンスゲ×ゴンゲンスゲ)として報告された(大場,1984. 神奈川自然誌資料(5):74).その後,箱根白銀山,双子山,須雲川源流,湯河原土肥大杉の沢,伊豆達磨山などで採集され,比較的明るい所に生えるものはよく結実し,果胞は無毛で嘴がやや長いことがわかった。また,Koyama(1955, J.Jap.Bot. 30:129-137)がミヤマカンスゲとホンモンジスゲの雑種として報告したイズホンモンジスゲ *C. ×teramotoi* T.Koyama も同一のものであることが判明した。

ミヤマカンスゲの変種として記載されたもので匍匐枝を出すものには,*C. multifolia* Ohwi var. *stolonifera* Ohwi, *C. multifolia* Ohwi var. *imbecillis* Ohwi, *C. multifolia* Ohwi var. *toriiana* T.Koyama があるので,これらの変種のタイプ標本をチェックしたところ,ハコネカンスゲとしたものは福岡県背振山から記載された*C. multifolia* var. *stolonifera* と同じものであることがわかった。Ohwi(1931)の原記載には和名が出ていないが,杉本検索誌でツルミヤマカンスゲの和名を使用している。

結実すること,かなり広範囲に見られることから,雑種ではないと考え,県博,東大,科博,京大のミヤマカンスゲの標本をチェックしたところ,同様のものが兵庫県笠形山・雪彦山周辺,徳島県名西郡神山町雲早山(alt.1200m)からも見出され,関東以西の本州,四国,九州の山地に点々と分布していることが示唆された。ミヤマカンスゲとは全体に小形で葉が軟らかく,やや地上性の太い匍匐枝を伸ばし,果胞が無毛

な点などで異なり,ミヤマカンスゲとは別種としてもよいような分類群であるが,この点については今後の課題としたい。詳細については他のミヤマカンスゲの種内分類群とあわせて,日本スゲの会会報第8号に報告した。

セイタカスズムシソウ(ラン科)

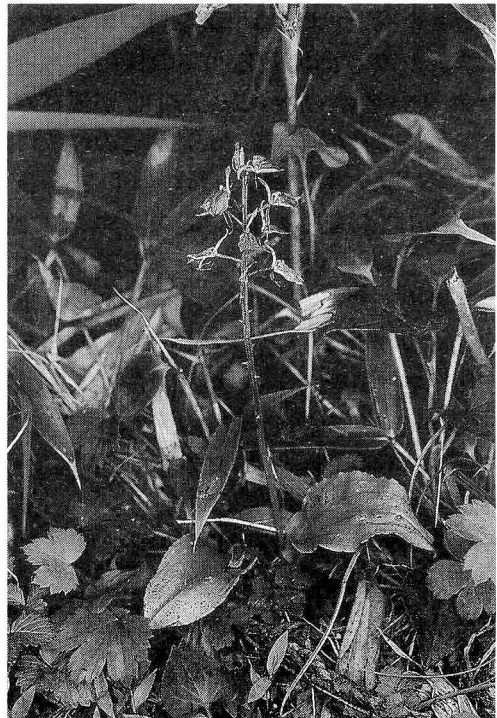
Liparis japonica Maxim.

県内では丹沢で記録されていたが,箱根からは報告がなかった。詳細な産地を報告するのは控えるが,1998年7月22日に箱根で確認することができた。

モミジカラマツ(キンポウゲ科)

Trautvetteria carolinensis (Walt.) Vail var. *japonica* (Siebold et Zucc.) T.Shimizu

植物誌1988では取り上げられていないが,1962年に丹沢山,1979年に桧洞丸で標本が採集されていたことを丹沢大山自然環境総合調査報告書 丹沢山地動植物目録(1997)で報告した。1998年8月25日に丹沢



セイタカスズムシソウ。箱根, 1998.7.22.

山～蛭ヶ岳の北面の湿った岩場でかなりの個体数を確認することができた。蛭ヶ岳～桧洞丸や丹沢山～三峰山稜方面の北面でもシカが踏み込めないような急な岩場には残っている可能性が高いと思われる。
ハイキジムシロ(バラ科)

Potentilla anglica Lichard

吉川アサ子さんが横浜市都筑区茅ヶ崎町で採集された。ヨーロッパ原産の上記の学名の植物と同定され、日本新産の帰化植物として報告した(勝山・田中, 1998. 植物研究雑誌, 73:175-177). 根生葉は5小葉からなり、莖は地面をはって長く伸び、花は莖葉の腋に1個ずつつけ、4弁のものが多い。

アメリカゴウカン(マメ科)

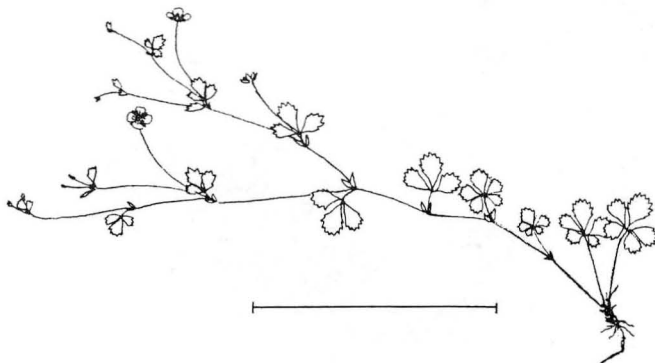
Desmathus illinoensis (Michx.) MacMillan ex Robinson & Fern.

座間市小池東原の畑地で採集された。すでに沖縄に帰化が報告されているが、本土への帰化ははじめてと思われ、ヒメツクバネアサガオ、アメリカクサレダマとともに松本雅人氏との共著で植物分類地理 49:74-76に報告した。

ヒメハマアカザ(アカザ科)

Chenopodium leptophyllum Nutt.

シロザに近縁な植物であるが、全体に繊細で、高さ20cmほどである。葉が線状披針形のために一見するとホソバノハマアカザに似ている。北アメリカ原産で浅井(1973, 植物研究雑誌, 48:70-71)が横浜、静



ハイキジムシロ。スケールは10cm.

岡県清水港、千葉県木更津への帰化を報告していたが、植物誌1988ではふれられていない。1998年、座間市小池東原の畑地で松本雅人氏が採集され、25年ぶりの再度の帰化の記録となった。付近は牛の肥育を行なう畜産農家が多い地域で、その飼料から牛糞を経て散布されたものと推定される。

ハマアカザ(アカザ科)

Atriplex subcordata Kitagawa

植物誌1988では「神植誌1958に産地を示さず記録してあるが、今回の調査では確認していない」とある。科博や都立大には次のような標本が残されているので、かつては東京湾沿岸、三浦半島、湘南海岸などにかなりの分布があったものと想像される。生育地は必ずしも塩湿地だけではなく、ゴミがたまるような砂浜や河口周辺などにも見られるので、三浦半島あたりでは現存する可能性もある。相模鎌倉 Aug.26,1956 Y.Asai TNS-283145; 鎌倉 Aug.27,1956 S.Okuyama TNS-257940; 相模横浜 Sep.16,1894 採集者未記入 TNS-19325; 横浜平沼 Oct.2,1893 牧野富太郎 MAK-41310; 横浜平沼 Sep.3,1894 牧野富太郎 MAK-97328; 藤沢市鶴沼 May,30,1960 西尾和子 KPM-NA0003363; 江ノ島 1935 牧野富太郎 MAK-97327; 横須賀天神島 Nov.20,1955 水島正美 MAK-2489

ミナミハマアカザ(仮称)(アカザ科)

Atriplex suberecta Verdoorn

座間市小池東原(1998年5月、6月)と相模原市磯辺峰山(1998年7月)で松本雅人さんが不明のアカザ科植物を採集された。花は単性で果実は2枚の大きな苞葉に包まれる点でハマアカザ属とわかる。日本産のハマアカザ属はハマアカザ、ホソバハマアカザの2種があり、ホコガタアカザが帰化しているが、いずれも頂生の花穂をつくる。本種は花

が葉腋に束生するので、これらとは容易に
区別できる。南アフリカで記載され、オース
トラリアに広く分布し、ハワイに帰化して
いる上記の学名の植物と思われる。南半
球の原産なので上記の和名をつけて整理
することとした。詳細は今シーズンの発生
状況を観察してから報告する予定である。
アメリカアワゴケ(アワゴケ科)

Callitriche terrestris Raf.

横浜市での発見者である河津英子氏と
の共著で日本新産の帰化植物として植物
研究雑誌に投稿中である。すでに横浜市西
区、神奈川区、保土ヶ谷区、南区、中区、相模原
2、相模原3、海老名の各メッシュで採集され
ており、県内各地に広がっている可能性が
高い。在来のアワゴケによく似ているが、
葉はへら形で細く、果実には短いながらも
明らかな柄があり、稜が翼にはならない。
アワゴケと同様に庭などのやや湿った裸
地に生え、ときには両方が同じ庭に生えて
いるのを見ることもある。アワゴケは4月
から11月頃まで見られるが、アメリカア
ワゴケは4月から7月頃までに限られるよ
うである。6月の梅雨頃までに、アワゴケが生
えている庭が近所にある方は注意して見
ていただきたい。

イケノミズハコベ類似植物(アワゴケ科)

イケノミズハコベ *Callitriche stagnalis*

Scop はヨーロッパに広く分布し、北ア
メリカに帰化している水草で、山梨県の富士
山周辺のクレソン畑に帰化したことが報
告されている(森田・李, 1998. 植物研究雜
誌 73:48-50)。松本雅人氏が相模原市など
の複数のクレソン畑でイケノミズハコベ
に似たアワゴケ科植物を採集された。葉が
倒卵形で5脈があり、水中葉があまり発達
せず、茎の先端にロゼット状に葉をつけて
浮く点などは *C. stagnalis* によくあうが、
果実が直径1.5mmほどで、稜にはきわめて
狭い翼しかない。*C. stagnalis* の果実は直
径1.8mmあり、稜には広い翼があるとい
うので、ぴたりとは一致しない。ヨーロッ
パの *C. platycarpa* Kutz. あたりが有力候補
になっているが、葉の形など植物体全体は
C. stagnalis の方によくあう。学名につ
いては引き続き検討したい。クレソンを栽培
している地域では注意して欲しい。
アメリカキカシグサ(ミソハギ科)

Rotala ramoisor (L.) Koehne

北アメリカ原産のミソハギ科キカシグ
サ属の帰化植物。吉川アサ子さんが1997年
8月に横浜市保土ヶ谷区花見台の公園の植
え込み内で採集された。1998年夏には見ら
れず、一時的な発生であったが、日本での
最初の記録である。詳細は神奈川自然誌資
料(20)に報告した。



アメリカアワゴケ. 河津英子撮影.

アメリカクサレダマ (サクラソウ科)

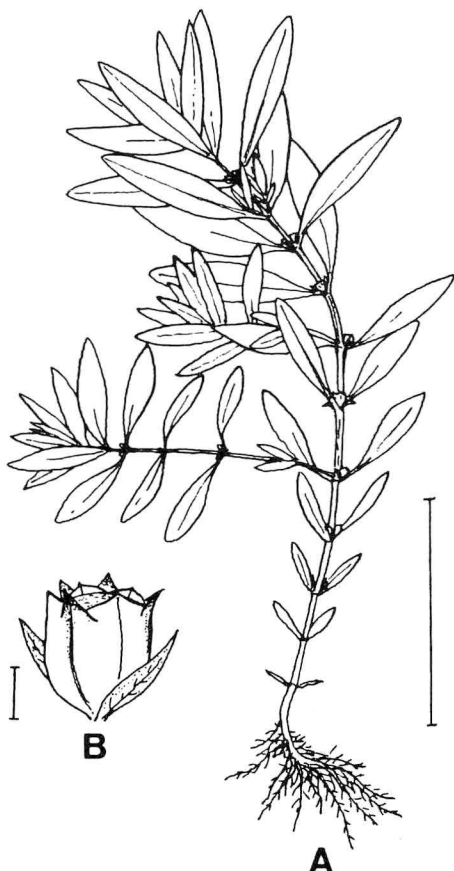
Lysimachia ciliata L.

座間市栗原の遊水池内で採集された。花は黄色で、クサレダマに似るが、葉の裏面に腺点がない。北アメリカ原産の上記の学名のもとと判明し、アメリカクサレダマの和名をつけ、日本新産の帰化植物として、松本雅人氏との共著で植物分類地理49:74-76に報告した。

シロバナノホトケノザ(シソ科)

Lagopsis supina (Steph.) Ik.-Gal. ex Knorr.

ミナトメハジキの和名で *Flora Kanagawa*(34)に報告したメハジキ属に似たシソ科植物は中国原産の上記の学名のもので、すでにシロバナノホトケノザの和



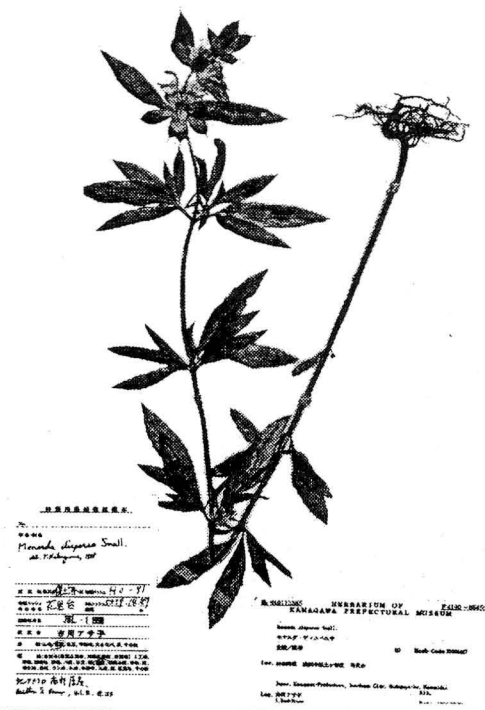
アメリカキカシグサ。A:全草(スケールは5cm)、B:萼筒に被われた果実と2個の苞葉(スケールは1mm)。神奈川自然誌資料(20)より転載。

名があることが判明した。1992年4月に横浜市中区新港埠頭で採集され、3年間ほど生育していたが、埠頭の整備により失われた。いわゆる一時帰化ではあるが、日本への最初の野生化の記録である。詳細は神奈川自然誌資料(20)に報告した。

モナルダ・ディスペルサ(シソ科)

Monarda dispersa Small.

吉川アサ子さんが保土ヶ谷区花見台の路傍で1998年7月1日に採集された。花や花序のつくりがタイマツバナ *M. didyma* L. に似ているので、*Monarda* 属と判断し、Britton & Brown, *Illust. Fl.* より *M. dispersa* と同定した。*Monarda* 属はアメリカ合衆国からメキシコにかけて12種ほどが分布し、タイマツバナやヤグルマハッカ *M. fistulosa* L. がよく栽培されている。また、ケショウヤグルマハッカ *M. punctata* L. が山梨県に帰化の記録(村田源, 1982. 分類地理, 33:354)がある。



モナルダ・ディスペルサ。

ヒメツクバネアサガオ(ナス科)

Petunia parviflora Juss.

座間市小池の畑地内で採集された。高さ10cmほどの小型の植物で、一見するとゴマノハグサ科クワガタソウ属植物に見える。栽培されるペチュニアの仲間で、南北アメリカに分布し、オーストラリアやニュージーランドに帰化している。花冠は淡青色の漏斗形で長さ5~7mmしかない。日本新産の帰化植物として上記の和名をつけ、発見者の松本雅人氏との共著で植物分類地理 49:74-76に報告した。兵庫県加西市でも1995年に採集され、上記の学名のもと同定されていた(水田光雄, 1998. 兵庫県植物誌研究会会報, (36):7)。

ヒロハフウリンホオズキ(ナス科)

Physalis angulata L. var. *angulata*

山本絢子さん, 中山博子さん, 松本雅人さんが, センナリホオズキに似た植物で, 茎や葉は芽の部分を除いてほとんど無毛で, 花冠内面中央に紫黒色の斑がないものを持ってこられた。同じものは神奈川県植物誌1988のセンナリホオズキの標本にも数点含まれていた。上記の和名を新称して整理することにした。葉は卵形で縁には不揃いな鋭鋸歯があり, 花柄は5~15mm, 果時に10~20mm, 花時の萼は裂片も含めて長さ4~5mm, 萼裂片は長さ2~2.5mm, 葯は長さ約2mm。北アメリカ原産。学名の*P. angulata* は日本では古くからセンナリホオズキにあてられていたが, 本種が本当の*P. angulata* で, センナリホオズキは*P. pubescens* L. である。これらについては, 次のホソバフウリンホオズキ, ナガエノセンナリホオズキの学名とともに別に詳細に報告する予定である。

ホソバフウリンホオズキ(ナス科)

Physalis angulata L. var. *lanceifolia* (Nees) Waterfall

北アメリカ原産のホオズキ属でヒロハフウリンホオズキに近縁な植物が採集さ

れている。茎や葉がほとんど無毛な点, 花冠内面中央に紫黒色の斑紋がない点などがヒロハフウリンホオズキと共通するが, 葉が披針形で, 花柄は花時に20~30mm, 果時には30~50mmに達すること, 花冠が4~5mmと小さく, 花時の萼は裂片も含めて長さ2~3mm, 萼裂片は長さ1mm, 葯は長さ1~1.5mmしかない点で区別できる。上記の和名をつけて整理することにした。ホソバフウリンホオズキの葉は披針形で, 花柄が長いためにナガエノセンナリホオズキと誤解されやすいので注意されたい。ナガエノセンナリホオズキの花は直径15~20mmあり, 白色で中央が黄色で, ほとんど平開する。尚, ナガエノセンナリホオズキの学名は*P. pendula* とされてきたが, 北アメリカ西部の*P. wrightii* A.Grayに訂正すべきと思われる。

ウスゲホオズキ(ナス科)

Physalis longifolia Nutt. var. *subglabrata* (Mackenz. et Bush) Cronq.

相模湖町で1998年7月に酒井藤夫さんが採集された。多年草で地下茎がある。茎の上部を除いてほとんど無毛。萼は脈上のみ短圧毛があり, 花冠は直径10~15mmあり, 平開せず, 花冠内面に紫斑がある。花糸は扁平で葯と同じ位の幅がある。葯は長さ3~4mmある。北アメリカ原産。上記の和名を新称して整理することにした。

ウスユキムグラ(アカネ科)

Asperula trifida A.Gray

箱根双子山や神山にあることが以前から知られ, 東大, 科博, 都立大に標本も残されているが, 植物誌1988では未確認とされた。ところが, 標本を配架している際に, 高橋秀男さんが昨年夏に双子山で採集したヨツバムグラの標本があった。どこか様子が変だなと思い, ルーペで葉の毛をチェックして見たところ, 葉の下面脈上と葉縁にのみ短毛が生えており, ウスユキムグラと判明した。ヨツバムグラでは葉の上面下面

ともに全体に粗毛が散生している。

ウスユキムグラは花冠に短い筒部があるので、ヤエムグラ属(*Galium*)ではなく、クルマバソウ属(*Asperula*)にされているが、全体や葉の形はヨツバムグラ *Galium trachyspermum* A.Gray にきわめてよく似ている。花や果実がついていれば、花冠に筒部があることや、分果の表面が平滑なことで区別ができる。

植物誌1988で採集されたヨツバムグラの標本を再度チェックしてみた所、ケナシヨツバムグラ *Galium trachyspermum* A.Gray var. *nudicarpum* Honda とされていた箱根神山の標本(Sep.4,1983 勝山輝男 KPM-NA1023851)とヨツバムグラとされていた箱根双子山(Jul.11,1985 浜中義治 KPM-NA1023851)の標本がウスユキムグラであった。したがって、植物誌1988のケナシヨツバムグラを削除し、ウスユキムグラがHAK-4とHAK-5に分布点があることになる。

ククイモモドキ(キク科)

Heliopsis helianthoides (L.) Sweet

吉川アサ子さんが保土ヶ谷区星川2丁目
で1994年9月5日に採集された不明のキク科植物が未決標本の山の中にあつた。ヒマワリやククイモの類(*Helianthus*)に似ているので、そのあたりから調べ始めたが、冠毛が全く欠けているので、近縁の他の属を調べたところ、ククイモモドキ *Heliopsis helianthoides* (L.) Sweet と判明した。北アメリカ原産で、園芸用に導入されたが、性質が強く野性化しやすいようだ。植物誌1988では記録されていない。北隆館の帰化植物図鑑P.32に図が載っている。

ナタネタピラコ(キク科)

Lapsana communis L.

ヨーロッパ原産の1年草で、舌状花のみからなる直径9mmぐらいの黄色の頭花をつける。茎の下部の葉は著しい頭大羽状に分裂し、上部の葉は卵形である。1999年2月

に川崎市高津区久地で高橋英さんにより採集された。長田(1972,北隆館帰化植物図鑑)は1959年に神奈川県への帰化を記しているが、神奈川県植物誌1988では採集されていない。

神奈川県植物誌イネ科の担当から のお願い

(佐藤恭子)

植物誌改定のための野外調査は、あと少しになってしまいましたが、イネ科植物について、採集に際し特に注意していただきたいケースをいくつかあげてみましたので、ご協力をお願いいたします。

(1)植物誌1988では、種内分類群を区別しなかったのですが、今回は分類を細かくする可能性があるため、できれば両者を区別して採集してほしいケース。

・チガヤ

フシゲチガヤ…稈の節に毛がある。
ケナシチガヤ…稈の節に毛がない。観察によるとフシゲチガヤに比べて葉身が短く、花期が1ヶ月近く早く、湿り気の多いところにみられた。

・スズメノテッポウ

スズメノテッポウ…水田に生育するタイプ。小穂長は3~3.5mm。
ノハラスズメノテッポウ…畑などのやや乾燥した場所に生育するタイプ。水田型に比べて小穂が小さく(2~2.5mm)、芒も短い。

・チヂミザサ

コチヂミザサ…全体に毛が少ない
ケチヂミザサ…葉面、葉鞘、花序の中軸に開出した毛が多い。

(2)種の変異の範囲に対する考え方が変わったケース。

・タイヌビエ

植物誌1988では、ヒメタイヌビエの小穂長を3mm、タイヌビエを4~5.5mmとしていましたが、ヒメタイヌビエには小穂がもう少し大きいものもあり、より明確に区別す



イヌビエ型
(ヒメタイヌビエ・
ヒメイヌビエ)



タイヌビエ型

るためには、第一苞穎の形(図)も用いた方がよいということがわかりました。そのため、植物誌1988でタイヌビエとされたものの中にヒメタイヌビエがかなり含まれていました。タイヌビエがすでに採集済みとされているメッシュでも両者に注意して調査を進めていただきたいと思います。

厚木市大山山頂植物記

(諏訪哲夫)

高校生の頃、石田光治郎「霊岳大山」(1917)の大山植物総目録を見て、いつか相模大山の植物を調べたいと夢みたことがあった。

1995年10月9日厚木市教育委員会の予備調査として不動尻(alt.345m)から唐沢峠(820m)をへて、大山山頂(1252m)までの植物調査が計画された。担当は、高橋秀男氏・田中美記子氏と筆者の3名、それに事務局から2名が加わった。標高50mごとに植物を記録して行き、唐沢峠でテツカエデとおもわれる植物を採集したが、これは、その後の研究でウリハダカエデと訂正した。800mでイヌブナ・モミ、840mでミズナラ・ブナ・シロヤシオを記録した。その時、大山の標高と植物の関係、植物ごよみなどのテーマを思いついた。14:30、925mまで登ったが急峻であり、帰りの時間のことも考え山頂は諦め、帰路についた。

そして、1998年に弁天の森(600m)、唐沢峠、厚木市側大山山頂を3班に分れて調

査することになった。筆者は、ヤビツ峠から登り、山頂から通称北尾根(1252~1150m)を担当することになった。以下は、その記録である。

1998年4月21日(火) 晴れ、4:30に起床し調査の支度をする。7:00厚木市郷土資料館で同行の真形氏と落ち合い、氏の車でヤビツ峠へ向う。東名の側道を利用するので、スムーズに走り8:00ヤビツ峠に着く。高度計を760mに調整し、直ちに登山にかかる。「植物ごよみ」のメモをとりながら登る。

マメザクラ・ヤマザクラが満開。マメザクラのお花見は、初めてなので気分がよい。ウグイスカグラ・コナラなどは、まだ花をつけていない。

10:30山頂着。阿夫利神社奥の院へ拝礼、休む間もなく山頂の調査にかかる。ここでもマメザクラが満開。電波塔のわきからスズタケのブッシュを抜けて北尾根へ進む、なだらかな斜面が気持ちよい。アブラチャンが満開、キクザキイチゲ・シコクスミレなどが花をつけている。

1150mで調査を打ち切り、昼食。13:00に山頂へ戻る。調査時間は、2時間半位。下山しながらも植物ごよみのメモはとる。

14:00すぎヤビツ峠着。しばし、喉をうるおして15:00帰路へ。郷土資料館で採集品の押し葉を30分位して、今日の行程を終えた。標本乾燥は、明日の予定。

5月31日(日) 晴れ、雨天がずっと続いたので月末になってしまった。今日は真形氏の都合がつかず、単独行となる。登山連盟の行事で駐車場は満杯、仕方なく道路わきへ駐車。

植物ごよみのメモをとりながら登る。ヤマザクラは、実が熟している。ヤマボウシ・ヤマツツジが満開。山頂では、サラサドウダンが満開。北尾根のヤブデマリ・ミヤマガマズミ・ツクバネソウ・クワガタソウ・

ホソバテンナンショウも開花。特に、満開のヤマツツジがすばらしい。下山は、前回と同じ。

6月21日(日)曇り、今回は、豊田路子氏と同行する。厚木を6:40に出発したので、山頂へ10:00に着いた。登山中は山霧が立ちこめていたが、山頂はまずまずの天気。植物ごよみは、ウツギ・シモツケ・ヤマアジサイ・コアジサイが満開。ギンリョウソウも咲いている。北尾根では、クワガタソウ・ホガエリガヤ・エゴノキの花が目につく。ホガエリガヤは、主にミズナラ帯の植物で、私は初めて出会った。

下山途中、秦野側800mでクモキリソウの開花株を豊田氏が発見、2株のうち1株を採取した。

7月25日(土)曇り、健康回復の真形氏と同行。10:00山頂着。植物ごよみは、ウツボグサ・ホタルブクロ・タマアジサイ・ヤマユリ・シロバナイナモリソウ・キヌタソウ・ノリウツギなどが満開。

北尾根では、ヤマカモジグサの大群落が開花。バライチゴ・クロテンコオトギリ・タニタデ・ウスユキソウの花も見られた。ウスユキソウは、ブナ帯特有の種類だ。サラサドウダンは、実になっていて花期と違い同定に手間取った。

今日の山中は、山霧が濃く「雨降山」の別名もむべなるかなと感じた。

8月11日(火)曇り、真形氏と同行、山頂10:00着。植物ごよみは、マルバハギ・ウラハグサが咲きはじめ、キンミズヒキ・ダイコンソウ・リョウブ・ヌスビトハギ・アキノタムラソウが開花。秦野側970mで真形氏がハクウンランを採った。山頂～北尾根では、ケゴンアカバナ・リョウブ・ヤマモミジガサ・タテヤマギク・コフウロ・トンボソウ・ウスユキソウ・タニタデなどが開花。今回は、リョウブの満開とトンボソウを何株も見たのが印象的であった。

9月26日(土)曇り・雨、真形氏と同行、

7:45ヤビツ峠、9:50山頂。この間秦野側では、テンニンソウ・ノコンギク・シラネセンキュウ・アキノキリンソウ・フジアザミなどが満開、ヌスビトハギ・ヤマボウシ・クロテンコオトギリなどは、実になっている。その他の植物も目についたものは、すべて「植物ごよみ」としてメモし、標高を記録する。

山頂で小休止の後、北尾根へ向う。入口のスズタケが左右それぞれ1m幅に刈られ、歩くには楽だが今後、登山者の踏み込みが多くなるかも知れない。ここでは、ヤマトリカブト・ホソエノアザミ・シロヨメナ・センブリ・カシワバハグマなどが満開、リンドウは、蕾だ。フジアザミ・ウスユキソウは咲き終り、アブラチャンに花芽が見られた。

雨が降りだしたので、11:30、1150mのシナノキ大木から引き返し、山頂での昼食もそこそこに下山。雨は降ったり止んだり、風がないので傘をひろげた。

今日は、秋雨前線の通過で余りよい条件ではなかったが、一応調査の目的は達した。

10月28日(水)快晴、真形氏と同行。天候が悪く一日延しての山行、昨夜の雨で道は湿っているが今年一番の好天気だ。8:00ヤビツ峠、10:00山頂、ノコンギク・リュウノウギク・アキノキリンソウ・シロヨメナが満開、ヤクシソウは咲初め。1170mのガレ場から丹沢二ノ塔、三ノ塔、そして、その真ん中に三合目まで冠雪した富士の全容が見える。山頂からは、江ノ島・馬入川が望見できた。

ご神木のブナは、黄葉し半ば葉を落している。胸高直径を測ったら90cmあった。北尾根は、風当たりが強いためか樹木は大半、落葉し紅葉も貧弱だ。リュウノウギクの花も秦野側の1170mで見たのを最後に、山頂から北尾根では見あたらない。ここでは、花のあるものは皆無で、ホソエノアザミもロゼットになり、ケカマツカ・マユミ・

アズマイバラ・ヤマボウシの赤い実が目立つ。サンショウも実のある標本がとれた。1185mのツガの胸高直径は55cm, 1150mのシナノキのそれは70cmあった。

大山山頂は既に初冬、今年の植物調査も今日が最後かという感じ。はやばやと12:00に山頂へ戻り、昼食後下山した。ともあれ、4月から10月まで計7回、天候に苦労しながらも大山山頂調査を実施できたことは、ありがたいことであった。この短報が、今後調査する人の参考になれば幸である。

なお、1999年度はメンバーを交代し、佐藤恭子・藤田千代子・田中美記子の各氏が、ヤビツ峠～山頂～不動尻のコースで調査を既に3月から開始している。成果に期待するところ大である。

植物誌1988のコウセンガヤ

(木場英久)

植物誌1988でコウセンガヤ *Chloris radiata* Sw.とされている標本(全部で2点)は、どちらもアフリカヒゲシバ(ローズソウ) *C. gayana* Kunthの誤同定であることがわかりました。コウセンガヤは2小花よりなり、第一小花の護穎は側面から見て細い長楕円形ですが、神奈川県産の2点の標本は3~4小花よりなり、護穎も幅の広い倒卵形をしていました。

神奈川県産オヒゲシバ属検索表

- A. 総は、開出する メヒゲシバ
A. 総は、斜上する
B. 第1小花の護穎は細い長楕円形、第2小花の護穎の基部は滑らかに柄につながる (コウセンガヤ)
B. 第1小花の護穎は倒卵形、第2小花の護穎の基部と柄の境目は明瞭である
C. 第2小花は雄性(まれに両性) アフリカヒゲシバ
C. 第2小花は外穎のみに退化する
D. 小穂は2小花からなる オヒゲシバ
D. 小穂は3-4(5)小花からなる ムラサキヒゲシバ

日本産のオヒゲシバ属植物は、すべて帰化植物です。稈の先端に多数の総を掌状につけるイネ科植物で、2から5個の小花からなる小穂をつけ、第一小花は両性ですが、上方の小花は退化傾向にあります。護穎の先に長い芒があるのも特徴です。この属の植物はオヒゲシバ以外は標本があまり取られていません。以下に、神奈川県産のオヒゲシバ属の検索表を示しますので、ぜひ標本を採集してください。

『神奈川県植物誌1988』で取り上げられていない帰化植物ほか(2)

(田中徳久)

「神奈川県植物誌2001」に向け、勝山輝男氏同様、備忘録として、「神奈川県植物誌1988」の補遺等を報告する。

Crepis capillaris と *Crepis setosa*

「神奈川県植物誌1988」で大場達之氏によりナイトウニガナと新称された *Crepis capillaris* は、森(1978)により、すでにセイヨウニガナの和名が新称されていた。セイヨウニガナと呼ばれた *Crepis capillaris* の標本は、現在も本調査会で活躍されている山田文雄氏が、1977年6月15日に戸塚区平戸町で採集したものである。

県博にある山田文雄氏が1980年7月6日に戸塚区平戸町で採集したアレチニガナの標本ラベルには、セイヨウニガナを消

し、別の筆跡でアレチニガナと書かれている。山田文雄氏と森茂弥氏が、*Crepis capillaris* に対して同じ認識を持っていたとすると、森(1978)の報告した *Crepis capillaris* は、*Crepis setosa* アレチニガナの誤同定であったとも考えられ、*Crepis capillaris* にナイトウニガナの名前が残ることも考えられた。しかし、森(1978)は、総苞片の脈上に腺毛があることを記しており、これは「神奈川県植物誌1988」の大場達之氏の *Crepis capillaris* の記述と一致する。厳密に言えば、森(1978)の報告のもとになった標本を検査する必要があるが、現状では、*Crepis capillaris* はセイヨウニガナと呼ぶのが適当であると思う。

なお、アレチニガナは、「神奈川県植物誌1988」では、横浜市と横須賀市で記録されているが、小松崎(1972)は、逗子市に蔓延していることを報告している。

ヨツバハコベ *Polycarpon tetraphyllum*

横浜の河津英子氏が、1997年5月30日、横浜市西区みなとみらい3丁目目で採集した。ヨツバハコベは、ナデシコ科の1年草で、葉が4枚輪生する。世界的な広分布種で、「日本帰化植物図鑑」(長田, 1972)、「原色日本帰化植物図鑑」(長田, 1978)に図がある。サンシチソウ *Gynura japonica*

横浜の野津信子氏が、1997年8月14日、横浜市栄区本郷台で採集した。サンシチソウは、キク科の多年草で、頭花はすべて両性の筒状花からなり、黄色く、葉は卵形～長楕円形で、羽状に深裂する。中国原産で、薬用に栽培されていたが、現在は逸出している。「日本帰化植物図鑑」(長田, 1972)に図がある。

コンロンソウ *Cardamine leucantha*

「神奈川県植物誌1988」では触れられていないが、正宗(1976)が箱根の外輪山で記録している。県博には、最近、海老名市の河又猛氏が持ってこられた、海老名市伊勢山で1957年10月26日に採集され

た標本がある。

ツガ *Tsuga sieboldii*

「神奈川県植物誌1988」では、丹沢山塊のみに記録があるが、正宗(1978)が、箱根外輪山で記録している。その後、井上香世子氏・蛭子貞二氏・勝山輝男氏ほか、箱根町湯本～三所山で1998年11月21日に採集した。

文献

小松崎一雄, 1972. アレチニガナ逗子に蔓延す。植物採集ニュース, (64): 55.

森茂弥, 1978. セイヨウニガナ(新称)が横浜に上陸。植物採集ニュース, (98): 27.

正宗巖敬, 1978. 箱根植物新報(二)。北陸の植物, 24(1): 18-19.

先人の標本をたずねて(1)

—ハーバリウムの標本調査から—

(高橋秀男)

先人の収集した標本で、「神奈川県植物誌2001」の参考になる資料を順次紹介していきたいと思う。調査したハーバリウムは東京大学総合研究博物館・東京大学理学部附属植物園(TI)、東京都立大学牧野標本館(MAK)、国立科学博物館(TNS)、横浜市こども植物園(YCB)、神奈川県立生命の星・地球博物館(KPM)などである。このデータの一部は、神奈川県RD調査報告書に発表したものも含まれている。また、ローマ字で書かれたラベルを、和文に直したものもあるので、ラベルの原文とは若干異なっている。この記録を作成するに当たり、標本の閲覧を許可され、色々と便宜を与えられた、ハーバリウムの先生がたに、厚くお礼申し上げる。

なお配列は不同である。

1. ウメガサソウ(イチヤクソウ科)

相州逗子神武寺 Jun.3.1928 原寛 TI

相模大磯高麗山 Jun.4.1921 小倉謙 TI

2. ガガブタ(トチカガミ科)

小田原濠 Jul.20.1935 採集者不明 TI

3. オグルマ (キク科)
お玉ヶ池 Sep.20.1926 T.Sawada
(澤田武太郎) TI
芦ノ湖畔胴切 Sep.22.1933 T.Sawada
(澤田武太郎) TI
4. コウリンカ (キク科)
箱根神山 Aug.31.1926 T.Sawada
(澤田武太郎) TI
丹沢山 Aug.24.1950 山崎敬一TI
5. ミズノオ (シソ科)
相模茅ヶ崎 1915 牧野富太郎 MAK68646
(2枚) Det.G.Murata
相模戸塚 1915 牧野富太郎 MAK68647
Det.G.Murata
相模平塚 Sep.1905 牧野富太郎 MAK36025
6. オオヤマツツジ (ツツジ科)
相模津久井郡と瀬町見沢 ca.220~500m
Mar.26.1959 水島正美 MAK24461.
7. シロバナナンバンギセル (ハマウツボ科)
横浜市川島 Sep.15.1934 松野重太郎 TI イ
ロナシギセル(nov.) Det.Y.Momiyama,1978
8. ヤマウツボ (ハマウツボ科)
足柄下郡箱根山 May.25.1914 牧野
富太郎 MAK176529
9. トキシウ (ラン科)
箱根仙石原 Jun.13.1937 富樫 誠 TI
10. ハコネラン (ラン科)
相模箱根神山(澤田武太郎氏コレヲ発見
ス) Jul.19.1930 久内清孝 TI Det.
F.Maekawa Type (*Hakoneaste sawadae*
とされている)
11. ムギラン (ラン科)
相州鎌倉建長寺 (イブキビヤクシンに
着生) Jun.3.1928 原 寛 TI
津久井郡三井村 Feb.21.1960 原 寛 TI

1999年度総会報告

(事務局)

1999年度の総会が、1999年4月17日
(土)、県立博物館講義室で開催されまし
た。1998年度の事業報告、決算報告がなさ

れ、1999年度の運営体制と事業予定、予算
が審議され、可決されました。

その後、植物誌改訂のための調査につ
いての説明と、各ブロックの活動状況の報
告がありました。続いて、勝山輝男氏からホ
オズキ属の分類について話題提供があり、
盛況のうち、閉会しました。

● 1998年度 事業報告

1998年2月28日 1998年度総会

(横浜市こども植物園)

1998年2月28日 第2回執筆者会議

(横浜市こども植物園)

1998年6月20日 フロラカナガワ46号発行

1998年7月26日 第2回編集委員会

(神奈川県立生命の星・地球博物館)

1998年9月5日 第3回編集委員会

(神奈川県立生命の星・地球博物館)

1998年10月31日 第3回執筆者会議

(神奈川県立生命の星・地球博物館)

1998年12月20日 フロラカナガワ47号発行

その他

『初山泰一先生卒寿記念論文集』の販売
(継続)

『初山泰一先生卒寿記念論文集』の新しい植物誌会員への配布 (継続)

※なお、「神奈川県植物誌2001」のための活動は割愛しました。

作業委員 ブロック事務局十執筆者
ブロック事務局

横 浜：高橋秀男・堀川美哉・武智憲治
川 崎：吉田多美枝・吉田三夫
三 浦：山田友久・青木清勝・大森雄治
湘 南：守矢淳一・浜口哲一
厚木(小)：諏訪哲夫・佐藤恭子・槐 真史
相模原(小)：秋山幸也
津久井(小)：小崎昭則
箱 根(小)：井上香世子・古川公貴
その他：城川四郎・勝山輝男・木場英久・
田中徳久

執筆者 省略

編集委員 城川四郎・大場達之・大森雄治・
小崎昭則・浜口哲一・山本 明・高
橋秀男・勝山輝男・木場英久・田
中徳久

会計監査 諏訪哲夫・秋山 守

事務局 勝山輝男・木場英久・田中徳久

※ 作業委員は、植物誌の改訂のための調査な
どの調整作業を行い、各ブロックの事務局と
執筆者で構成される。

● 1999年度 事業計画

『神奈川県植物誌1988』改訂のため検
討・調査

『神奈川県植物分布図集』（分布点の確
認用）の刊行

フロラカナガワの発行（年3回、4月・
9月・1月頃を予定）

フロラカナガワ総目次の作成

野外研究会・標本同定会（基本的に各ブ
ロックが主催し、事務局は連絡を受
け持つ）

『初山泰一先生卒寿記念論文集』の販売
促進（継続）

● 1999年度 運営体制

顧問 初山泰一

代表 城川四郎

運営委員 秋山 守・大場達之・大森雄治・
小崎昭則・小原 敬・笠原基知治・
北川淑子・鈴木一喜・諏訪哲夫・
高橋秀男・西山清治・長谷川義人・
浜口哲一・守矢淳一・村上司郎・
山本 明・勝山輝男・木場英久・
田中徳久

(今年度末にはデータの収集を行いたい)

・推定比較数量

多：多い。その種の生育する環境に広く分布し、個体数も多い。

普：普通。広く分布するが、個体数は多くない。または、数ヶ所にたくさん生える。

少：少ない。数ヶ所に少数が生える。

稀：稀。調査期間中に1～3回、少数が発見されただけ。

訂正

(事務局)

本誌前号529ページの山本明さんの報文の冒頭にある「*Athyrium sheareri* (Bak.) Ching form. *saitoanum* Sugim.」は原稿には無かったものですので、この部分を削除してください。この学名は、ホクリクイヌワラビをウラボシノコギリシダの品種として扱った場合の物です。山本さんの文章を読み進むとホクリクイヌワラビは、ウラボシノコギリシダとイヌワラビの雑種 *Athyrium* × *saitoanum* (Sugim.) Seriz. と示してあるのに、冒頭に別の学名を入れてしまいました。

山本明さんや読者の皆様にご迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。今後このようなことの無いように心がけるとともに、発行までの時間を惜しまずに、著者の皆様に確認をお願いするようにしたいと思います。ご協力をお願いいたします。

編集後記

先日の総会でお配りした資料や、現在作成中の分布図集では、時間的な制約から、城川さんや佐藤さんが紹介して下さったような「分類群の範囲の変更」には対応しきれないと思いますが、追って本誌等で最新の採集状況をお伝えしたいと思います。

●「神奈川県植物誌2001」のための調査について

1. 今後のスケジュール

基本的に、2000年の前半までが調査期間となるが、実質的な調査は、1999年で終了し、その後は補充調査となる。

1999年6月 暫定版分布図の作成・配布

2000年5月 原稿提出

原稿の確認

編集作業

2001年3月「神奈川県植物誌2001」出版

2. 今後の調査の進め方

事務局で作成したブロックごとのチェックリストにより、穴埋めのための採集を行い、さらに全種について、各調査メッシュごとの推定比較数量(4段階;「平塚植物誌」を参照)についてのデータを収集する。

なお、推定比較数量のデータは、ブロックごとに集約し、事務局で取りまとめる